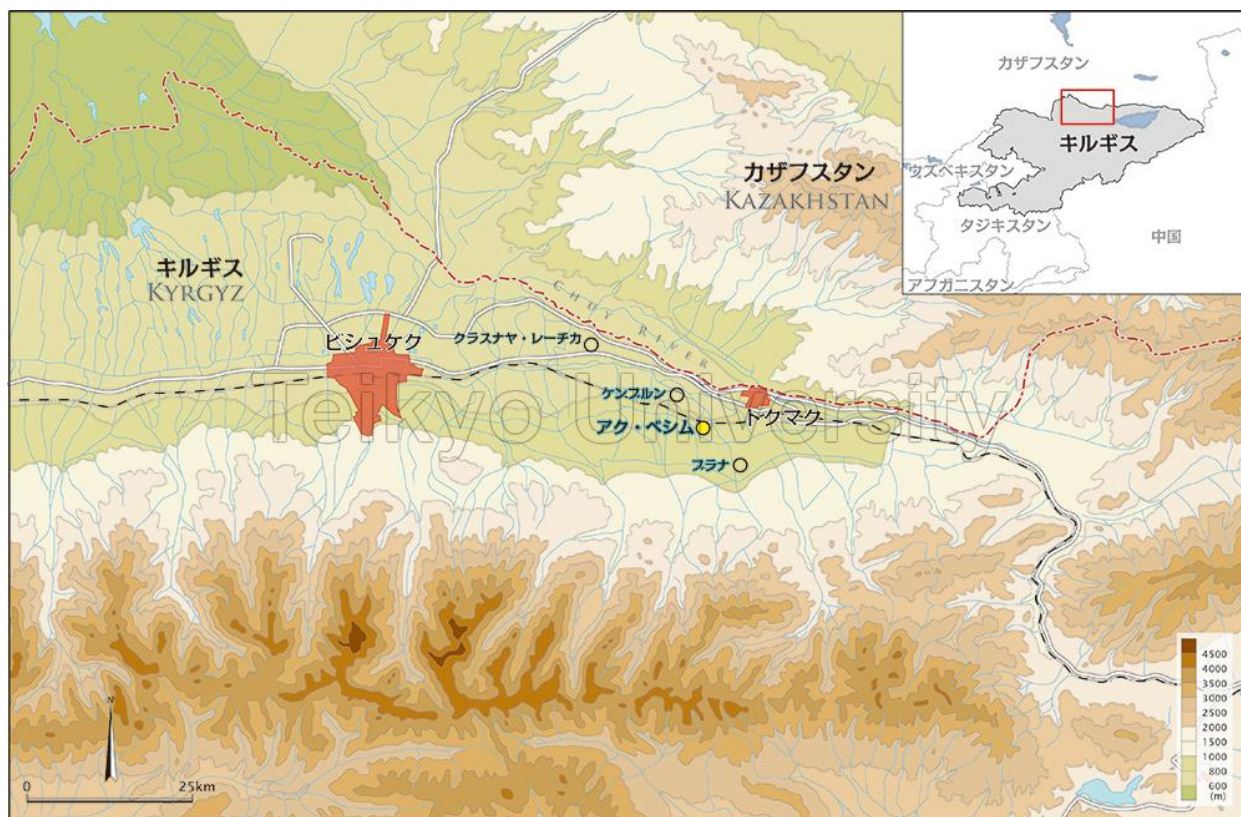


**帝京大学シルクロード学術調査団による 2018 年度第 1 次アク・ベシム遺跡調査
 ―唐代碎葉鎮城の調査―**

帝京大学シルクロード学術調査団はキルギス共和国北部、チュウ州アク・ベシム村に位置するアク・ベシム遺跡（スイヤブ遺跡）の第 2 シャフリスタンにおいて発掘調査を実施し、唐の西方進出の軍事・行政拠点であった安西四鎮の 1 つである碎葉鎮（さいようちん）城の 7 世紀後半のものと推定される建物の一部を発見しました。



これまでの経緯

- ・帝京大学は 2016 年 4 月、ユーラシア大陸を貫く文明の交流の道であるシルクロードの学術調査を目的に「帝京大学シルクロード学術調査団」を設立。
- ・2016 年 4 月に帝京大学文化財研究所とキルギス共和国科学アカデミーの間で、文化遺産の調査研究及び保護に関する合意書を締結。
- ・2016 年 4 月より、帝京大学はキルギス共和国科学アカデミーと共同でアク・ベシム（スイヤブ）遺跡の本格的な学術調査を開始。
- ・これまでに 2016 年度は 2 回、2017 年度は 3 回の計 5 回の現地調査を実施。2018 年度第 1 次調査は通算で第 6 回目の調査。
- ・2017 年度の調査成果について、以下の帝京大学のウェブサイトをご覧ください。
<https://www.teikyo-u.ac.jp/affiliate/research/sr.html>

○スイヤブ（アク・ベシム遺跡）と玄奘、そして李白

アク・ベシム遺跡は、かつてスイヤブと呼ばれていた都市です。2つの都市が隣り合っている中央アジアでも極めて稀な遺跡です。西側に位置するのが、シルクロードの交易の民であるソグド人が建設したとされる都市（第1シャフリスタン：6～11世紀）で、東側に位置するのが中国の唐が建設した「碎葉鎮城」（第2シャフリスタン：少なくとも679年には建設、以後8世紀の初めには放棄）です。

インドへの求法の旅に向かった玄奘は、630年頃に、現在、第1シャフリスタンと呼ばれている「素葉水（スイヤブ）城」を訪れました。また、中国唐代の詩人で「詩仙」と称される李白が生まれた場所であるとも推測されているのもこのスイヤブ（アク・ベシム遺跡の第1シャフリスタン）です。

○唐代碎葉鎮城とは

安西四鎮は、中国唐代に、西域統治のために安西都護府のもとに置かれていた四つの都督府です。一般に亀茲（きじ）・于闐（うてん）・疏勒（そろく）・焉耆（えんき）を指すものとされますが、唐の勢力が最も西まで拡大した時期には、その最西端の拠点として「碎葉鎮」が設置されました。

2017年度の調査では、同じく第2シャフリスタンにおいて、火災によって焼失したと推定される建物の屋根に葺かれていた唐の時代の瓦が大量に堆積した状況（幅約2m×長さ約25m）が確認されています。

○井戸、石敷き遺構及び建物

2018年度第1次調査では、第2シャフリスタンにおいて上述の瓦片の帯状堆積とは別の瓦片の堆積部分で発掘を継続したところ、瓦の堆積の下から井戸と推定される遺構とその北側と西側に設置された石敷き遺構が発見されました。

この石敷き遺構は、赤や白、緑などの石を組み合わせ花の文様を描き出したもので、造形的にも美術的にも優れたものです。中央アジアでは初めての発見であり、地元でも、この発見は大きな驚きとなっています。北側の石敷きの寸法は長さ3.5m、幅1.1mで、東側は後世のゴミ穴によって壊されています。現存で6個の花の文様がありま



石敷き遺構（西側）部分

すが、上下（南北）2列になっていたものと考えられます。西側の石敷きの寸法は長さ3.5m、幅0.6mで、6個の花の文様が一行に並んでいます。南端は縦積みのもみ垣による溝で区画されていますが、さらに南側に続いています。

井戸の大きさは直径1.8mです。今回の調査では、この井戸の半分、深さ約110cmまで発掘を行いました。調査によれば、井戸は唐の時代に建物を造り変える際に埋め戻されたと考えられており、来年度、発掘を進めることによって、井戸の中から当時の生活の痕跡を示す遺物が発見されることが期待されます。



石敷き遺構（北側）及び建物の縁石
（右上方に見えるのが井戸）

この石敷き遺構及び井戸の北西側では灰色レンガ（塼）列が見つかっており、建物の縁石にあたるものと想定されることから、北西側には建物が存在しているものと推定されます。

また、この石敷き遺構の北側では、灰色レンガ（塼）で構築された「雨落ち（あまおち）」とみなされる遺構の一部も見つかっていることから、この地点には当時の建物が広がっていたものと推定されます。



雨落ち遺構

○建物の基礎となる瓦敷き

また、調査区の東側部分では、帯状に瓦の破片を敷き詰めた状況が複数発見されました。現時点では、これらは建物の基礎であったものと推測されています。



瓦片で造られた建物の基礎 1（東側地区）

○調査の成果

今回の調査によって、シルクロードが繁栄したこの時期、西方への進出、そして交易路の支配を求めた唐の拠点である碎葉鎮城が姿を現してきました。中国の様式をそのまま取り入れた石敷き遺構、瓦や塼は、中国人がこの地に進出し、新たな拠点を築こうとしていた証拠です。

その一方で、この碎葉鎮城の西側には、ソグド人が築いたとされる都市も存在していました。この隣り合わせの 2 つの都市は、まさに東と西の接点でした。今回の調査によって、この接点でどのような交流があったのかを解明する糸口をつかむことが可能となりました。

アク・ベシム遺跡は「シルクロード:長安-天山回廊の交易路網」としてユネスコ世界遺産に登録されていますが、今回の調査によって、その歴史的、文化的な価値がさらに高まるとともに、世界遺産の構成資産の範囲の変更のための重要な情報を得ることができました。

○今後の調査への期待

現時点での発掘調査の結果に基づけば、碎葉鎮城は 2 度もしくは 3 度にわたって改築されたことがうかがえます。今回発見された遺構は、最初の碎葉鎮城が建設された際の建物である可能性があります。これが、679 年に王方翼（おうほうよく）によって建設された「碎葉鎮城（『旧唐書（くとうじょ）』）」であるのかどうか、今後の調査によって明らかとなっていくことが期待されます。

2017 年度及び 2018 年度第 1 次調査によって、この地点にかつての碎葉鎮城が位置していたことを確定することが可能となりました。また、今後の調査によって、1300 年余りにわたって土に埋もれていた碎葉鎮城の全貌を明らかにする確固とした手掛かりを得ることができました。

調査主体：帝京大学シルクロード学術調査団、キルギス共和国・国立科学アカデミー

調査責任者：山内和也（帝京大学文化財研究所教授）。バキット・アマンバエヴァ（国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所）

調査期間：2018年4月17日（火）日本発～5月19日（土）日本着

現地調査期間：4月18日（水）～5月15日（火）

参加者：山内和也、櫛原功一、中山千恵、望月秀和、中山誠二（帝京大学文化財研究所）、高木暢亮、筒井裕（帝京大学文学部）、三橋友暁（大学院博士課程）、佐藤剛（帝京平成大学）、八木浩司（山形大学）、岩井俊平（龍谷大学）、大谷育恵（京都大学 PD）、福田大輔（有限会社アド・デザイン企画）、バキット・アマンバエヴァ、エミル・スルタノフ、アスカト・ジュマバエフ（キルギス科学アカデミー）、日本人ボランティア4名（計20名）



アク・ベシム遺跡全景（2016年撮影）



アク・ベシム遺跡全景及び調査区の配置



アク・ベシム遺跡全景（2018年撮影）



第2シャフリスタン調査区全景



井戸及び石敷き遺構



石敷き遺構（北側）



石敷き遺構（北側）全景



石敷き遺構（西側）全景



石敷き遺構（北側）部分



瓦片で造られた建物の基礎 2（東側地区）